冒険は３０歳から

ごぬやまたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冒険は３０歳から

【Ｎコード】
Ｎ１４８０Ｚ

【作者名】
ごぬやまたろう

【あらすじ】
３０を目前にし、彼女どころか職もなく、引きこもり生活を送る智生。
現実を見据える事が出来ず、叶わないとわかっていながらも二次元へ走る一人の男の物語。

いえのなか（1）

「ク…ソワ…ロタ…っと」

小気味良いキーボードのタイプ音の締めとして、少し強めにエンターキーを叩く。

「クソワロタ」とは笑いを表すネットスラングとしてよく用いられる表現であるが、智生の顔は笑みを帯びていない。

心の中で表情を変化し、現実に自分の表情を映さない生活にはもう慣れた。

今更変えようとも思わない。

そもそも最近は体を軽く動かすだけでも疲れてしまうのだから、わざわざ無駄に動かす事もない。

でも、部屋はそろそろ片付けた方が良い気がする。菓子袋がひしゃげていたり、畳まれていたり、もう一度手を突っ込んでほしそうにこちらを向いていたり。様々な表情の袋が殺風景な部屋に鮮やかな色を映している。そのせいからか、油くさい匂いが常に部屋を漂うようになった。

そんな状況においてもなお、中々行動に移す気が起きないのは、『本当にやばいと思えばやる気が出る』などという自分なりの信念のせいだ。智生はそれを部屋の掃除のみならず、ありとあらゆる事に対して適用させていた。信念と言うよりは怠慢さを冗長させた末に生まれた考えに過ぎないのだが、今の所はこれで良い、と満足していた。

右手にはパソコンのマウス。少し離れた所には電化製品のリモコンが散らばっていて。

左手は常に油モノの菓子類の袋に突っ込まれ、延々と菓子袋から口中への往復運動を繰り返す。

――そんな生活が続く事だけが望みだ。

右手で左クリックしつつ菓子袋に残った粉を器用に口に流し入れていると、

――とん。

突然の現実の物音に、ネットの世界から現実に引き戻される。智生は少し体をこわばらせたが、すぐに音の正体に気づくと、小さく舌打ちした。

とん、とん、とん。一定のリズムで、ある程度の重量が木の板を鈍く叩く。

聞こえる音が大きくなる度にいらつきが少しずつ増していく。

いつになっても気を使えないな…本当にあいつは駄目だな、全く。

口に出すのもめんどくさい、呆れて物も言えやしない、と思考が続いた所で、ゆっくりと部屋のドアの方を振り向く。

目に入ったのは縦方向の内鍵。

智生が慌てて鍵を締め直そうとするのと同時に、がちりとドアが開いた。

生活臭のこもった部屋が久しぶりの外の空気をつつましく受け入れようとするやいなや、

「て、てててめぇ！か、っかか、勝手にはいんなっったろババア！」

智生が久しぶりに出した大声はかすれ、どもった。思った通り言葉を吐きだせない。

それでも効果はそれなりにあったようで、ドア越しに誰かがびくっとした様子が見て取れた。

「ともちゃん…ごめんね」

言いながら、声の主はドアを閉める。

「ともちゃん当てに郵便来てたわ。ここに置いとくね」

がさがさ、と紙の袋のすれる音の後に鈍い音が反響した。

重い何かだろう。しかし、この頃は好きなアニメも特になく、通

販でよく頼むフィギュアは何も買っていないはず。
智生には覚えがなかった。
ぼやっと好きなアニメを思い出そうとすると、母親はか細い声で、
「…ともちゃん」
「またかよ。あんだよババア」
邪魔するな、と言わんばかりに眉根を釣り上げて答える。
「ともちゃん、クレジット使ってもいいけど、使いすぎないでね。本当に、お願い。パソコンの勉強のためだって知ってるけど…」
智生が足を強く踏んだ。怒る時の癖だと知っている母親は、反射的に身を縮める。
「あのな、親は子供を養うのが義務なんだよ？四十過ぎてそんな事も分かんないの？子供が可愛くないの？あーあ、本当に不幸な親持ったわ。勉強してる俺に気遣いなく音立てて近づいてくるし、教科書もまともに買わせてくれねーじゃん。何なのマジ。いつも自分だけが不幸みたいな顔しやがってさー。俺だってこの貧乏な家に甘んじてやってるんだよ？金がない事に対して俺が我慢してやってるってのに、まだ上から押さえつけようとするんだな？俺は昔からそういう所が嫌だったんだよ！これだから親って奴は！」
智生は一気にまくしたてると、上気して赤みがさした顔で憎き肉親をぎっ、とにらみつけた。母親は大体、これでいつも諦めて何も言えなくなる。智生の必殺の文句だった。
母親は何か言いたそうな顔をしていたが、やがてうつむきを答えとした。しかし、無意識なのか、つい口をついて言葉が漏れる。
「ともちゃん、昔はあんなに可愛かったのにね…。『僕はこのゲームの勇者になるんだ』なんて。…1本だけしか買ってあげれなかったゲームをずーっとやって、もう面白くもなんともないだろうに、私にいつもニコニコ話を聞かせてくれてたよね」
やっと聞きとれるほどの小さな言葉だったが、智生の虚を突くには十分だった。
智生は反論しようとしたものの、程なくして母親は「あ！ガス栓

締め忘れちゃった！」という声とともに慌ただしく遠ざかってしまった。
母親の足音が聞こえなくなると、智生はいつもの様にぶつぶつと悪態を呟く事もせず、収まり悪そうにしている開きかけた口を仕方なく閉じ、
いつの間にか怒りで立ち上がりかけていた腰をよろよろと座椅子に戻した。

――なぜかあの言葉が頭に残る。でも、思い出せない。何のことだった？
ゲーム、確かに好きだった記憶はある。昔からゲームが好きだった。といっても、1本のソフトしか持ってなかった事も覚えてる。ゲーム機が高すぎて、流行りのソフトまで買ってもらう事は出来なかった。だから、ワゴンの中でくすぶっていた中古ゲームを買ってもらったんだ。外箱もなければ説明書もなかったけど、初めてのゲームだからすごく面白く感じて。そこまでは思い出せる。
しかし、勇者になりたかった頃の自分がまるで想像できない。『何バカなこと言ってんだ』と平手で後頭部をはたいてやりたいくらいに、大きくて、そして叶わない夢だ。そんなに夢見がちだったろうか。昔から卑屈で、友達もいなくて、悪い方に現実的な人間だった気がする――。
智生ははっと顔を上げると、首を振り、過去を思い出そうとする思考を頭から追いやる。
…忘れよう。現実の事は。叶わないとわかっていても、俺は理想に生きるんだ。

いえのなか（2）

智生は慌ててパソコンの前に向き直ると、ネットゲームの戦友からのメールを確認した。

…案の定、５通のメールが届いていた。メールの内容はどれも「お前がいないと倒せない。早く来てくれ」というものだ。

――しょうがないな、あいつらは。俺がいないと何にも出来ないんだからな…。

智生が熱を入れているネットゲームは複数人で協力して１匹のモンスターを倒していくものだ。平日もほとんどの時間をネットゲームに費やすことのできる智生はもちろんほとんどのプレイヤーと比べて強い。今では全く知らないプレイヤーから声をかけられることも少なくなく、１０数人で構成されるゲーム仲間のグループを３グループほど掛け持ちするまでになった。

智生はそれらのメッセージにすぐ参戦する旨を返信しようとして、ふと何か引っかかるものがあり、キーボードのタイプを止めた。

――何か、忘れてるような……？

智生はキーボードの上空数センチに両手を浮かせたまま一瞬考え込むと、

――あ、そうだ、荷物。…めんどいけど、中身見とくか。

重い腰を上げ、ドアを必要最低限だけ開けた。

手探りでドアの外の荷物らしきものを掴むと、鈍い音の通り、少し重みを感じる。

引きずるようにしながら部屋に入れドアを閉めると、今度こそ内

鍵をきっちりと掛ける。
邪魔な闖入者はもう来ない。
智生はぎしっと軋む音に構わずどっかりと椅子に腰かけると、自分だけの世界にようやく浸れる恍惚感をかみしめていた。

智生の久しぶりの体全体を使った動作の疲れが落ち着いた頃、伸び始めている髭に右手をこすりながら疑問を投げかける。
「なんだろうなぁ、これ…」
智生が腕組みしながら見下ろしている物は大きめの箱だった。といっても、開封していない茶色の段ボールに過ぎない。
しかし、貼り付けてあるシールに記載されている住所は見知らぬ場所で、差出人も知らない名前となれば、疑問を投げかけるには十分な物体だった。それも、一企業からではなく、個人からの郵便物なのだ。これで、注文したまま忘れた何かという線もなくなった。
「爆弾じゃないよなぁ、うん、多分」
腕組みしながら箱を見下ろしてみる。箱は音を発したり振動することもなく、静かに横たわっていた。
「中に女の子が入ってたらどうしよう、なんて。昔の俺なら考えたかもな…」
知らない女の子が突然自分と親しくなるという幻想。
しかし、幻想は幻想のまま。幻想が現実になる事なんて、ありえない。誰もがそれを理解しながら大人になっていく中で、一人だけ取り残されて、やっと気付いた頃にはもう遅かった。理想を妥協して現実に近付けていくことが大人になること、歳を重ねる事だとわかった時には、その手に何も残っていなかった。それでも失ったものを何とか埋めたくて、仮想の現実に逃げて、仮想の慣れ合いで心を落ち着かせる。
現実で手に入らなかった仲間と地位を仮初めの世界で得て、それで満足する。それが智生の人生だった。

――だから、もう夢は見ない。今の生活さえ続けば、それで満足だ。

――養う親が死んだら、その時考えればいい。

いつの間に目を閉じて考え込んでいたのだろう。智生ははっと顔を上げる。

「それはともかく。…開けるか」

見ても分からないとなれば、まずは開けてみるしかない。

智生は前かがみになると、箱の梱包用テープの先端を軽くひっかいてから思い切り引きはがす。

珍しいことにテープは途中で切れることなくすんなりと封の役目を終え、くたびれた体で床に転がった。

それと同時に弾かれるように開いた段ボールのふたを掴み、中を覗く。

「何だ…？これ」

…そこには、また箱があった。

しかし、開ききっていない段ボールのふたが蛍光灯の光を遮っている為、よくわからない。

「あーもう、めんどくさい…」

智生はため息をつきながらゆっくりと椅子から立ち上がると、箱の前に腰を下ろした。

箱を若干手前に引き寄せつつ、ほんの少し段ボールの抵抗を感じながら箱のふたを開ききる。

「どうせ何かの忘れた通販だろ……ん…え？は…？」

そこに広がっていたのは色鮮やかな空色だった。

済んでいるとは形容しがたいものの、雲一つない快晴だ。

そのはるか下界、つまり地上には黄土色の大きな城。
そこを取り囲むように、数人の鎧を着た男が真剣な眼差しで雄叫びをあげている。わずかに鎧からのぞいている腕は筋骨隆々で、さながら軍隊のよう。そのうち数人は剣やら銃やら、現代社会においては所持罪に問われそうなモノを掲げている。
遠くに見える黒い雲がかった空には、とげとげしい鎧を着た悪人面の怪物が笑っている。

そして、中心部分に大きく1人、空の怪物を睨む少年。

――それら全てが小さい箱の表面に収まっていた。

――そしてその箱は。

――幼き日の智生の全てだった。

智生は呻いた。
これぞ、非日常。
知り合いのほとんどいない智生に差出人不明のゲームソフト。
そしてそれは、幼き日に最も遊んだあのゲームソフトだ。

もしかして、もしかするのか。
大好きなアニメや、漫画や、小説なら、この展開は腐るほど見てきた…。
全くその前兆はなかったが…。しかし……！
やっと俺にやって来たんだ。時代が俺に追いついたんだ…！
俺に非日常がやってくる…！俺の手の届くすぐそこに、待っている――？

しかし。

ひとしきり喜びを噛みしめるその笑みの後には、悲しみによる嗚咽が後を追った。

ひとしきり泣いた後、いつの間にかぐちゃぐちゃになった顔を乱暴に擦ると、智生は服の上からでもわかるほど折り返され、畳まれている腹の肉を掴んだ。

そして少し悲しげな目つきをすると、顔を上げて、部屋を見回した。

菓子袋、アニメのポスター、ゴミ箱から溢れるティッシュ、手垢だらけのキーボードがついたパソコン。自分でも何に使ったのかわからない紙類やプラスチックのケースが散乱し、足の踏み場があまりない。

智生の年齢…肉体…社会的地位…。

智生が涙を流していた理由は、時の残酷さだった。

智生は己の情けなさに、泣いていた。

本当は、一目見た時気付いていた。いや、もっと前から。箱の中身が光でよく見えないなんてのは方便で、信じたくなかっただけだ。こんな事が今更起きた所でどうにもならない。俺はもう主人公になれないのに…。

智生は思考するより先か後か、既にふたを開けた恰好のまま動けないでいた。

ありえない。こんなことが。どうして…？何でもっと早く、この時が来なかったんだ。

思考がぐるぐるととめどなく溢れ、混ざり、回っていく。

……ゲームだろうとアニメだろうと小説だろうと。これは主人公への転機そのものじゃないか…。

だが、もう、遅い…。何かも失って、こんなだらしない体で、ゴミ溜めみたいな生活で、性格も歪んでしまった。折角、「何か」が起こるかもしれないのに――

なにもかも、今の俺には、遅すぎた……。

いえのなか（3）

何秒、何分、何十分…？
どのくらい泣いていただろう。
ずっと敷いたままの灰色のカーペットに水滴が次々と撥ねて、散らばっていく。
せっかく、期待しないと決めていたのに…。
『非日常なんてありえない』と知っていたからこそ、期待していなかったのに。
本当は、『ある』のだ…。

智生はよろよろと立ちあがると、おぼつかない足どりであてもなく歩いた。
数歩歩いた所でドアにぶつかったが、気にせずそのままドアにもたれかかる。
涙は枯れても、まだ出したい、体から絞り出したいと体中で泣いているような気分だった。
もう顔面は涙なのか鼻水なのかよく分らないもので濡れているが、もう気にならない。

目に溜まる涙が乾いた頃、ふと、無意識にドアの側面の壁に掛けられていた鏡を見てしまった。
鏡なんてここ数年見ていなかったが――。

――なんて、おぞましい。

そこにいたのは、なりふり構わず泣いている無精ひげの男だった。
顎の下の肉はだぶついていて、清潔感もあまりない。
髪はぼさぼさであぶらぎっていて、もはや寝ぐせとも言えないうね

りが全体に広がっている。

『こんな男』が自分の姿とは、とても信じられない。
左頬をピクリと動かしてみる。
すると、鏡の男の右頬が同じように動いた。
それでも信じたくなくて、無理矢理口角を上げてみる。
しかし、鏡の男もまた、不器用な笑みを見せた。

――これが、俺か…。
鏡の男はまだ笑っている。
それは智生が笑っているからに他ならないのだが。
智生には、心で笑う事が出来ない自分の代わりに笑ってくれているような気がしていた。

智生はしばしの間、鏡から離れられずにいた。
これが、自分の３０年を無駄にし続けた男の顔なのだ。自身に言い聞かせる。

主人公になれるチャンスなんて今まで何度もあった。勉強でも、部活でも、日常生活でも。
でも、努力することを嫌がった。
努力することなく、年齢を重ねるだけでそれ相応の青春がやってくるなどという勘違いも甚だしい間違いをずっと信じて、のらりくらりとやってきた結果が、ほんのちょっぴりの『偶然』にすら過剰反応してしまう自分なのだ……。
漫画やアニメのように、主人公になるチャンスは得るものではなく与えられるものだと思っていた。

だから偶然与えられた、全く無関係の物に対しても過剰に反応するような人間になってしまった。

しかし、そんな心情とは裏腹に、鏡の男はいつまでも智生に笑顔を振りまき続けている。

まるで道化であるかのように。笑う事を止めない。

――そして、気付いた。

――この男は、智生の代わりに笑ってくれているのではなく。

――智生の事を、笑っていたのだ。

智生はひっ、という声にならない声を上げた。

とたんに鏡の男は笑うのを止め、泣きはらした目をきょろきょろさせる。

智生は男のいなくなった鏡を乱雑に壁から外すと、裏にしてベッドの上に放り投げた。

「……滑稽だな…。すっげえあほらしい…。こんなゲーム一つで一喜一憂して、俺の今までがどうだのって…。何やってんのかな」

顔を袖で激しく擦りながら呟く。

全身に感覚が戻るようだった。

遅ればせながら、顔を濡らしていた液体の味を噛みしめる。

……久しぶりの涙の味は懐かしさと恥ずかしさが混じって、苦く感じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1480z/

冒険は３０歳から

2011年12月20日00時49分発行